

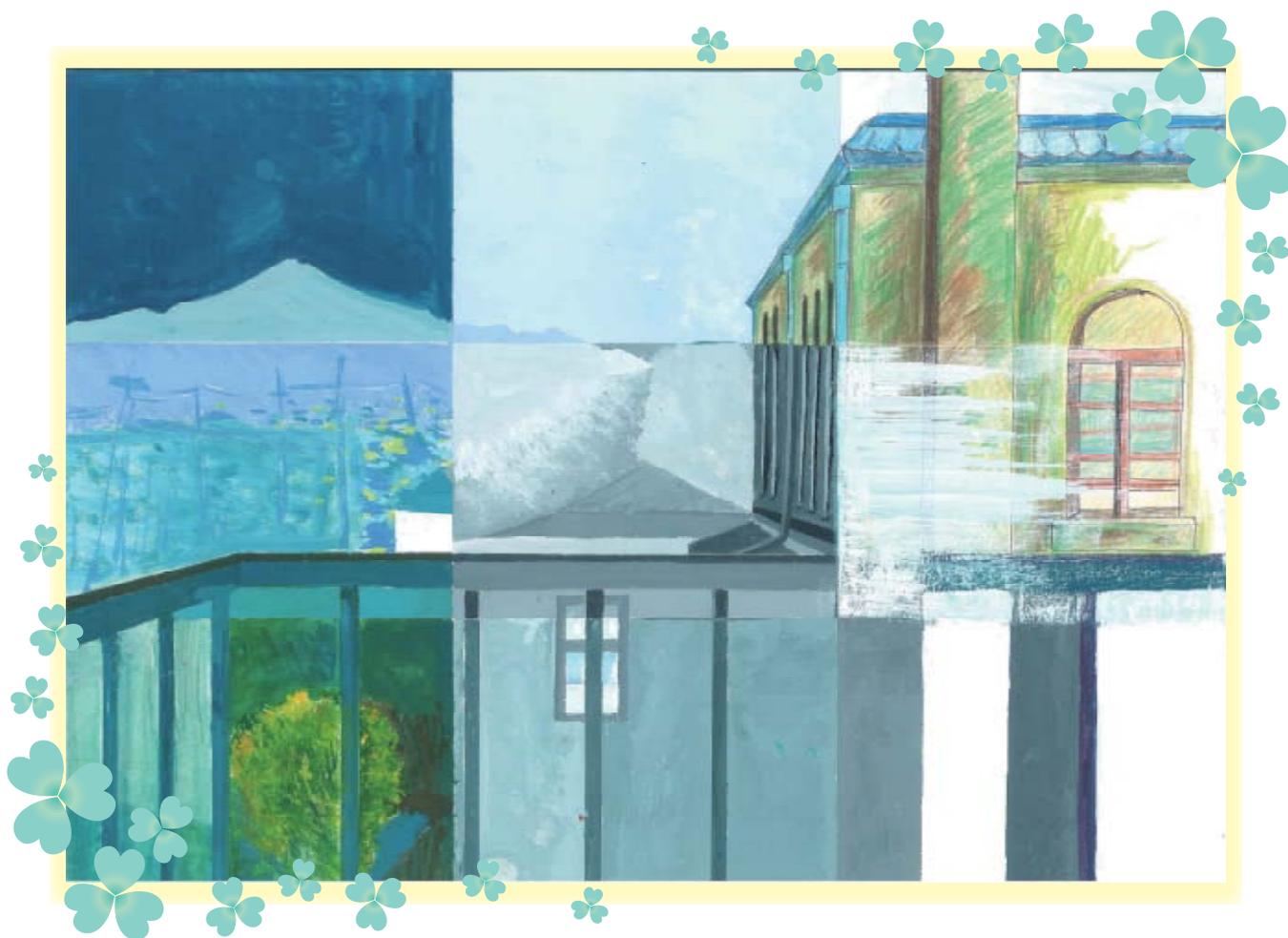


KYOKY

124

特集 **がんばっています！教育学研究科**
(理科教育での取り組み)

特集 **教員研修モデルカリキュラムの開発研究**
—京都市との連携プロジェクトに現職大学院生が頑張っています—



京都教育大学

<表紙>

附属京都中学校 2年 宮原 ななせ

学校の外階段から見た比叡山とその手前にある紫明会館を描き、構図を九分割してそれぞれ異なる技法で仕上げた。一番手前に階段の柵を描いたのは、十七世紀スペインの画家・ベラスケスの代表作「ラス・メニーフス」のように自分のいる場所と作品の中の風景が一続きだと感じられる作品に仕上げたかったためである。



CONTENTS



<表紙> 附属京都中学校 2年 宮原 ななせ

学長就任の挨拶

- 2 学長就任に当たって
社会的信頼を回復し、
京都教育大学の理念・目的の遂行
学長
位藤 紀美子

特集

- 3 がんばっています！教育学研究科
(理科教育での取り組み)
- 10 教員研修モデルカリキュラムの開発研究
—京都市との連携プロジェクトに
現職大学院生が頑張っています—
副学長・理事(前 附属教育実践総合センター教授)
岡本 正志

海外見聞録

- 12 ハノイ師範大学での
障害児教育教員養成に参加して
発達障害学科講師
丸山 啓史

研究余滴

- 14 「雀の学校」をめぐる
—教育の文化的遺産の継承を考える—
国文学科教授
植山 俊宏

留学生の声

- 16 夢に向かって
教育学部 教育学専攻4回生
鄭 雪蓮
テイ セツレン (中国吉林省延辺出身)

京教学内探訪

- 17 幼稚園で何を学んでいるの…?
附属幼稚園副園長
鍋島 恵美

附属学校園だより

- 19 に組夏休み登校日・宿泊学習
附属京都小学校
に組担任
- 20 輝かしい活躍
附属京都中学校副校長
橋本 雅子
- 21 44期 研修旅行 長崎
小値賀島・野崎島への旅
附属高等学校副校長
斉藤 正治
- 22 臨海学習
附属特別支援学校副校長
春原 克彦

新任の先生から

- 23 理学科准教授 中野 英之
- 23 国文学科准教授 寺田 守
- 23 体育学科准教授 小松崎 敏

卒業生の声

- 24 何とかなる！
尼崎市立七松小学校教諭
佐野 竜也
- 25 自分を支えてくれる人
姫路市立香呂小学校教諭
毛利 彰太
- 25 食と農の大切さを伝えたい
農事組合法人伊賀の里
モクモク手づくりファーム
角谷 環

ようこそ大先輩

- 26 私がおもう教師道
京都教育大学同窓会副理事長
辻 迪夫

読者の皆さまへ・編集後記

- 27 地域連携・広報委員会委員長
武蔵野 實

学長就任に当たって 社会的信頼を回復し、京都教育大学の理念・目的の遂行

学長 位 藤 紀美子



京都教育大学は、平成21年2月25日に学生の起こした不祥事により社会的信頼を失いました。大学の根幹に係わる問題として受け止め必要な対策を実施しつつ、改めて「人間教育」の重要性をふまえた教育・研究を進めてまいります。

京都教育大学は、1876（明治9）年、京都府師範学校として設立され、1949（昭和24）年には新制京都学芸大学として出発しました。その学則には、「学芸についての深い研究と指導とをなし、教養高さ人としての知識、情操、態度を得させると共に、教育者たらんとするものには更にそれに必要な教養を得させることを目的とする」と明記され、「自由闊達にして、真に学芸に根ざす所の裕かな人間性を涵養し、自由創造性に富んだ人士を養成することを根幹とする」大学であることが示されています。創設以来133年、戦後の学芸大学としてから60周年に及ぶ歴史と伝統を受け継いでおります。時代や社会の要請により組織や課程等が変わることはあっても、「教育者を養成する」その基本の理念・目的は同じです。寺田光世前学長の「人を育てる知の創造と実践の大学」というメッセージもこれまでの流れに則ったものです。

本学には、教育学部学校教育教員養成課程、特別支援教育特別専攻科、教育学研究科修士課程、及び連合教職実践研究科（教職大学院）が設置されています。また附属機関として、教育実践総合センター、環境教育実践センター、特別支援教育臨床実践センター、情報処理センター、保健管理センターがあり、さらに幼稚園、二つずつの小学校と中学校、高等学校、及び特別支援学校の七つの附属学校を持っております。これらを有機的に関連づけることにより、人文・社会・自然などの諸科学、芸術、スポーツ等の専門研究はいうまでもなく、教育理論と実践とを関連づけた研究を行うことができます。またそれによって、総合的な視野を持つ資質・能力の高い教員を養成することができま

す。加えて、現職教員にも自らの教育実践を省察し新たな課題を探究することのできる研鑽の場を提供しています。さらに、学校教育のみでなく、広く社会教育や生涯教育に携わる人も多く輩出しております。

人としての誇りを持ち、学びつづける楽しさと他の人と係わる喜びを胸に抱いて、共に信じられる未来を切り拓いていくことができる個と集団を育てる、それが教師の仕事です。そうした優れた教育者を養成する大学として、改めて社会から求められ信頼されうる魅力ある大学になるよう努めてまいります。

（平成21年10月1日 記）



がんばっています！教育学研究科 (理科教育での取り組み)

理科教育エキスパート講座からコア・サイエンス・ティーチャー養成へ 理学科教授 村上忠幸

1. はじめに

教員養成GPを機に2006年から大学院理科教育専修に開設された理科教育エキスパート講座は、今年で4年目を迎えた。5年以上の教職経験を持つ先生を対象として、探究学習のコーディネーターの養成を目的としたこの講座には、現職の小学校、中学校、高等学校の理科好きな先生がさらなるスキルアップを目指して受講された。今年度まで、現職の先生方の受講者の合計は18人にのぼり、ディプロマ（エキスパート講座の修了証）を取得された。

現在、理科教育専修ではエキスパート講座をさらに発展させたコア・サイエンス・ティーチャー（理科のコア教員、以下CST）養成を目指した新たなプログラムを構想し、試行している。本稿では、エキスパート講座の成果とCST養成プログラムの展望について述べていきたい。

2. エキスパート講座の成果

2006年に開設された理科教育エキスパート講座は、本学の教員養成GP（2005-2006年、文部科学省による事業）の主要なプログラムとして、京都府・京都市の教育委員会と連携して現職教員の研修講座群の一つとして開講された。理科教育専修では、第5期（小・中学校1992年、高等学校1993年から実施）の学習指導要領から強調されてきた探究学習の実現を期して「探究学習を実現する理科教員はコーディネーターとしての役割を担う」という理念のもと、探究学習コーディネーター養成のための講座を開講した。講座は「理科教育実践総論」（前期、土曜日、集中講座）、「理科教育実践演習」（前期、夏期、集中講座）、「理科教育事例研究」（後期、土曜日、集中講座）の3科目構成とし、現職の先生には科目等履修生として受講していただき、修了者にはディプロマを授与した。また、理科教育事例研究は教育実践の事例をもつ現職教員のみを対象としたが、その他の授業は大学院の学生も受講し、教員と学生が発想と経験を交流させる場とした。これらの授業には、本学以外の研究、実践、指導の第一線で活躍している大学、教育現場、教

育委員会からの講師も多数招いて内容の充実を図った。さらに本講座の大きな特徴として、理科教育事例研究のなかに「ミニ修論」を設定していることがあげられる。これは、現職教員の受講者が、理科教育専修の教員を指導教員に選び、指導を受けて探究的な教材・プロセスを開発するものである。研究的な資質・能力の高まりこそが探究学習の実現には必要であるという我々の理念をかたちにしたものである。例年3月に成果の発表会を開催し、報告集「理科教育教材開発研究のまとめ」を作成している。

先に述べたように、この講座を修了してディプロマを取得した先生は18人である（2009年は取得見込み）。内訳は、小学校8人、中学校7人、高等学校2人、大学1人である。このうち大学院（または研究生）在学中に取得したのは7人である。また、この講座がきっかけとなって大学院に入学した先生は4名いる。

ふりかえてみると、この講座の開設は私たちにとって、これまでの教員研修への取り組みに対する発想を根本的に見直すもとなった。その一つは、1年という長期に渡って、良質の授業を提供する必要があるということであった。もちろん、これまでも公開講座、10年期研修など短期研修の経験はあったものの、それらは大学のいわゆるサプライサイド（提供者の立場）からの発信性が強く、教育現場の状況を十分に考慮したものではなかった。良質の授業の意味を問い直すなかで、いわゆるデマンドサイド（受講者の立場）重視の発想を受け入れ、それを有効に機能させる講座であるように設計することになった。「大学が大学の発想で提供する講座は、教育現場には役立たない」という批判に真摯に耳を傾け、しかも「明日役立つ」という期待に応えながら、それでいて長期的有用性のある内容になるように工夫した。その結果、全ての授業に実践的内容および実験を組み込み、探究学習のコーディネーターとしての基礎・基本および実践力を身につけることが可能となる内容が成立した。同時に集中講座であるため、授業を体験型として時間を短く感じるように配慮し、楽しく前向きに出席できるようにした。以下に3つの授業の概略（2009年）を示す。

授業名・目的	本学講師	外部講師（各1回）
理科教育実践総論（前期・土） 探究学習を実現するために必要なことについて、実践例、理論等について総合的に考究し、探究の知識、スキル、センスを養う。	沖花彰、芝原寛泰、樋口とみ子、坂東忠司、谷口和成、村上忠幸、	小笠原豊（刈谷市立亀城小）、滝川洋二（東京大）、谷岡義高（奈良女子大附属小）、小林俊行（静岡市立清水八中）、広木正紀（前京都教育大）、京都府教委指導主事、京都市教委指導主事
理科教育実践演習（前期・夏期） 理科の探究学習の授業およびカリキュラム開発を想定して授業・学習・評価について具体的な教材・事例を体験し、実践的に研究する。	松良俊明、細川友秀、梶原裕二、巻本彰一、田中里志、谷口慶祐、谷口和成、高嶋隆一、向井浩、村上忠幸、中野英之	西川光二（宇治市立北宇治中）、井原正美（尾道市立久保中）、谷村載美（大阪市教育センター）、松林昭（光華小）
理科教育事例研究（後期・土） 前半は、認知的探究、興味・関心的探究を体験する。後半は、マンツーマンの研究指導により教材開発を行い、探究学習とそのコーディネートの実践力を養う。	村上忠幸、谷口和成、他（ミニ修論指導教員）	

3. CST養成プログラムへ向けて

エキスパート講座の充実を受けて、私たちには「小学校理科の活性化に向けて新たな方策の実行」という次なる課題が浮かび上がってきた。学級担任制である小学校では、総じて、理科に対する苦手意識があったり無関心である先生が多いという現状がある。理科好きの先生が集まる学校外の教員研修などではこのような状況を感じることはないが、小学校のほとんど先生方が参加する校内研修や連携教育などでは、このようなことを度々感じた。多くの学校で、今日的な理科教育の重要性が強調され、理解されているが、本来的な理科教育の活性化に向けて、理科に距離感をもつ先生の実在を見逃すことはできないと考えたわけである。理科好きの教員を増やすことはもちろん大切なことであるが、それだけでは今日的な状況の改善は難しいと考え、そのための小学校教員全般に係る総合的・実践的な方略としてCSTの養成を考えるに至った。

我々の考えるCSTの必要性は、以下のような課題の認識からスターしている。

- ・ 小学校の理科嫌い・苦手な教員は理科関係の校外研修に参加しない
- ・ 小学校に理科の授業・研修をコーディネートする教員が少ない
- ・ 小学校理科で理科嫌い・苦手な教員も体験的に学習できる（児童が主体的に活動できる）教材や機会が少ない
- ・ 小学校を軸とした連携教育の有用性の波及が図れない

特に小学校理科の活性化（主に探究学習の実現）にとって、小学校を軸とした小学校間および中学校・高校との連携教育とその環境整備に向けてCSTへの期待は大きい。

ただ、CSTの養成に向けて、以下に示すような課

題があることも分かってきた。

- ・ CSTに必要な資質・能力はコーディネート力、コミュニケーション力であるという認識の共有が希薄である
- ・ 校外研修だけではコーディネートの実践力が身に付きにくい
- ・ 校内研修（日常的な教育活動を含む）を通じてコーディネート力を養成するという認識が希薄であり機会が少ない
- ・ CSTの養成に関わる指導者（大学教員、教委の研修担当者）の指導力の向上が求められる
- ・ CSTとして認知され、認定される環境が整備されていない

我々は、このような課題の解決に向けて、エキスパート講座とともに、教員、学校、教育委員会と連携して校内研修、地域（小規模）研修等、府県市（大規模）レベルの研修に講師などとして積極的に参加している。

CST養成のプログラムは、本学だけで成立させても養成したCSTの活躍はままならない。CSTが機能し、認知される状況も今後整えていく必要がある。CST養成プログラムの構築に向けて、我々はその内容の具体化と教育委員会との連携を進めている。

4. おわりに

2005年、エキスパート講座の準備を開始した頃には、CSTの発想はそれほど明瞭ではなかった。ただ、それ以前に行った英国の調査を通じて、コアティーチャーの存在を知り、有効に機能している姿が印象に残っていた。「いつかは日本でも」という思いはあったが、それが今、形になろうとしていることは日本の教育にとって、とくに探究学習の実現に向けて新たな一歩になることであろう。

以上のような、今私たちが行っている教育の充実への働きかけは、教科の学習の充実に向けたものが主である。日本の教育に欠けているのは、教科学習の意味の認識である。面白く、楽しい授業を作ることはもちろん大切なことであるが、それだけで自然に教科学習の意味の認識が成されるわけではない。今日のように

科学技術文明が浸透した社会では、総合学習、自然学習、シチズンシップ教育、キャリア教育などとリンクした「学ぶ意義」を認識できる学習カテゴリーの成立が喫緊の課題である。CSTの次には、このような教育をコーディネートする教員の養成が必要になろう。その前に、まずはCSTの充実を図りたい。

日英高校生サイエンスワークショップにおける研修テーマの講師を担当 理学科教授 細川友秀

日英高校生サイエンスワークショップ（日英SW）は、大学等の研究者の指導のもとで日本とイギリスの高校生がいっしょになって実験を行い、科学の楽しさや大学での学問の奥深さを体験することを主要な目的としています。この事業は、本学附属高校を主幹校として近隣のSSH指定校とイギリスの複数の高校が共同して、日本とイギリスを交互に会場として毎年夏休みに実施されてきました。今年、2009年は日本が会場の年で、2007年と同様に本学主催で本学を会場として、下の表1に示すように8月17日から22日まで6日間の日程で実施されました。

表1. 日英SWの概略スケジュール

17 (月)	ハンディクラフトセンターで伝統工芸実習ほか
18 (火)	午前：開校式、オリエンテーション 午後：研修1
19 (水)	午前：研修2 午後：研修3 夕：日英文化交流
20 (木)	午前：京都大学宇治キャンパス見学 午後：日英SWのOB,OGとの交流
21 (金)	午前：研修4 午後：研修5
22 (土)	午前：研修6（発表準備） 午後：研修7（公開発表会）、閉校式

参加した高校生は、本学附属高校から5人、京都府立洛北高校から5人、立命館守山高校から4人、County Upper School から2人、St Benedict's Schoolから2人、Hinchley Wood Schoolから3人、そしてColchester County High School for Girlsから5人でした。

研修には5人の講師によりそれぞれ担当するテーマが設定され、高校生は希望するテーマに分かれつつ、各テーマに日英ほぼ同数の生徒が参加するように調整されました。5人の講師はそれぞれのテーマで、高校の学習を基礎としつつも専門的な実験を組み入れて、高校では学習しない高度なレベルの内容をもたせて、自然科学の研究を体験できるように工夫しました。日英の高校生はそれぞれのテーマで英語を使って意思疎

通し、協力して実験を行い、最終日の研修6ではパワーポイントのスライドを手分けして作り、研修7の公開発表会で研究成果を発表しました。

5つの研修テーマは表2に示すように、物理、化学、生物の3分野にわたって、多彩な内容になりました。講師の内訳は本学から3名、京都大学から1名、そして、企業の研究者1名でした。

表2. 日英SWの研修テーマ

テーマ1	「マウスを使った免疫系の探究」 “Exploring the Immune System in Mice” 講師： 細川友秀 博士（京都教育大学）
テーマ2	「プラズマの世界～その性質から応用まで～」 “Exploring the Plasma World” 講師： 谷口和成 博士（京都教育大学）
テーマ3	「スターリングエンジンの製作を通じた化学技術の学習」 “Learning Science Technology through Production of the Stirling Engine” 講師： 関根文太郎 博士（京都教育大学）
テーマ4	「合金が溶解する温度は何度？～錬金術から化学への発展～」 “At what temperature do alloys melt? ~Development from alchemy into chemistry~” 講師： 長谷川将克 博士（京都大学）
テーマ5	「光学とレーザーと量子消しゴム」 “Optics, Laser, and Quantum Eraser” 講師： 比江島裕喜 博士（(株)片岡製作所）

筆者は、テーマ1「マウスを使った免疫系の探究」のImmunology Teamを指導しました。以下に筆者の指導したチームの活動の概略を記載します。

Immunology Teamでは、マウスを使った二つのシリーズの実験を行い、哺乳動物にそなわる免疫系の仕組みを探究しました。

研修1の前半で一つめのシリーズの最初、チームのメンバーには、微生物が人間の体に侵入するとき、よくある経路を二つ提示し（表3のaとb）、それぞれの経路から侵入した微生物を排除する器官を予想してもらおうとともに、その理由を考えてもらいました。

表3. 外傷による微生物の主な侵入経路と考察課題

- a) 血管内への侵入：
血液中に侵入した微生物などの異物は血液循環からどのようにして排除されるか？
- b) 血管以外への侵入：
血管内ではなく手足などの皮下や皮内に侵入した異物はどのようにして排除されるか？

このような事前の予想を立てた上で、細菌などの異物が血液中へ侵入した場合とそれ以外へ侵入した場合の、それぞれに対応する防御機構を調べる動物実験を行いました。実験では、体に侵入した異物の行方を追跡しやすいように、細菌のモデルとして墨汁を生理食塩水で希釈してマウスの尾静脈と後足の皮下に注射しました。そして、注射の翌日の研修3で、それぞれの経路で注射された墨汁が体内のどこにあるかを観察するために、マウスを解剖して注意深く主な内臓器官を観察しました。

尾静脈への墨汁注射については高校生の予想は、すべての班が肝臓をあげ、次に腎臓、脾臓の順でした。実験結果は写真1のとおり、血流に侵入した墨汁粒子は肝臓と脾臓で血液から排除されることが示されました。



写真1. 血管内注射した墨汁を捕捉する器官

また、後足皮下への注射については高校生の予想は、すべて注射部位に最も近いリンパ節をあげ、実験結果も写真2のとおり、注射した足の膝下リンパ節が墨汁を捕捉していることを示しました（反対側の足のリンパ節は正常）。

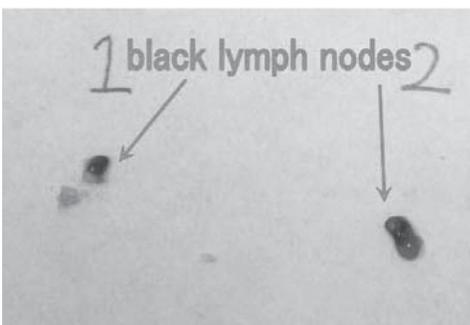


写真2. 皮下注射した墨汁を捕捉したリンパ節

さらに黒く染まった器官がどのようにして墨汁を捕捉するのか調べました。墨汁を捕捉した脾臓を細かいメッシュで裏ごしして脾臓細胞の浮遊液を得て、遠心分離して上澄みに墨汁粒子がないことを確認し（写真3）、脾臓を作っている細胞のうち貪食機能を持つ食細胞が墨汁粒子を捕捉していることを顕微鏡で確認しました（写真4）。

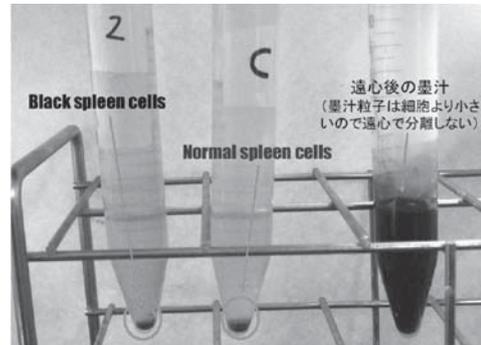


写真3. 墨汁を捕捉した脾臓細胞

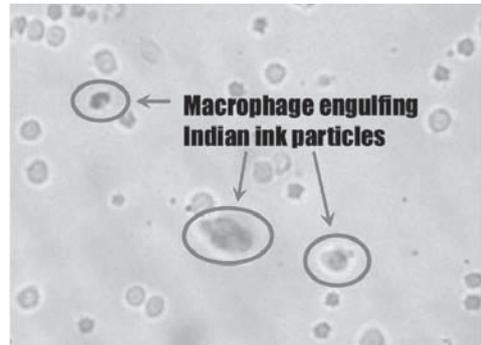


写真4. 墨汁粒子を捕捉した脾臓の貪食細胞

このようにして、Immunology Teamの高校生は自分たちの目で、体内に侵入する異物を排除する器官とその器官で働く食細胞を観察しました。

次に二つめのシリーズの実験では、食作用によって異物排除に働く食細胞が細菌などの異物を貪食した後の細胞機能を観察しました。細菌などを貪食した食細胞は、細菌などがもつ特有の分子によって活性化されて、強い殺菌作用をもつ活性酸素分子を分泌することが知られています。このシリーズの実験は食細胞の回収と培養をすべて無菌操作で行いました。高校生にはすべての操作が初めての体験でしたが、緊張しつつも何とかやり通すことができました。正常マウスの腹腔から食細胞を回収し、大腸菌の産物であるリポ多糖（LPS）とともに二日間培養して、食細胞から一酸化窒素（NO）を分泌させました。その際、神経内分泌系からの調節がどのように働かかを調べるため、ノルアドレナリンまたはコルチコステロンをさまざまな濃度で培養に加えて影響を調べました。

二つめのシリーズの実験は高校生には高度な内容と



実験技術が必要でしたが、実験結果はそれなりに妥当なものであり、チームのメンバーは協力して結果に関する考察を行い公開発表会で優れた発表を行いました。

た。Immunology Teamの指導者としては、チームのメンバーが科学の楽しさや大学での学問の奥深さを十分に体験することができただろうと思います。

中・大連携の取り組みSPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）

宇治市立北宇治中学校教諭 西川光二
理学科准教授 田中里志

1. SPPとは

文部科学省では、平成14年度より「科学技術・理科大好きプラン」を開始した。この「科学技術・理科大好きプラン」は、児童生徒の科学技術・理科に対する関心を高め、学習意欲の向上を図り、創造性、知的好奇心・探究心を育て、将来の科学技術の担い手を育成するための取り組みである。知的想像力が最大の資源である我が国においては、「科学技術創造立国」の構築を目指して、将来の科学技術の担い手である人材を育成することが強く求められている。そのため次代を担う優秀な科学技術系人材の養成は、我が国における技術革新と産業競争力強化の基盤を構築することでもあり極めて重要視されている。そして、この「科学技術・理科大好きプラン」の取り組みの1つにSPP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム、平成18年度より科学技術振興機構が所管しサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトと名称が変更）事業がある。

2. 中・大連携の概要

北宇治中学校と京都教育大学は、平成16年度より中・大連携の取り組みを行っており、実施当初は理学科の物理・化学・生物・地学ならびに産業技術学科の教員を中学校に迎えるかたちでSPP講座がはじまった。平成18年度からは中学校で実施する授業と

北宇治中学の3年生全員が大学を訪れて授業を受講する両方のスタイルで行なわれている。大学で実施される講義や実験・実習は10講座ほどが毎年開講され、その中から自由に選択する形式で進められている。現在では理学科、産業技術科学科そして教育実践センター所属の教員がSPPの授業を担当している。これまでの経過とともにSPPの実施概要を表1に示す。

3. SPPでの授業風景

SPP講座では理系に係る様々な講義や実験・実習が行なわれている。実施年度により開講される授業内容は異なるが、中学校理科1・2分野の内容をさらに膨らませたかたちで行なわれる授業や実験を中心としている。大学で実際に行なわれている内容に子どもたちが触れることができるのもSPPの醍醐味の1つである。行なわれている授業の一部をここに紹介する。

■光と音の身近な実験：光と音についての基礎実験（物理領域）

光の基本実験、ピアノ力の音の鳴る仕組みを確かめる実験、プラスチックチューブを回転させ、振動数と音程の関係を確かめる実験、カラーセロハンを使用している3D実験を各30分で行ない4つの実験を各々行う。

表1. SPPの実施概要

実施年度			総時間
16年度	選択教科の探究理科講座として北宇治中学にて実施する。	物理・化学・生物・地学を各2時間、京都教育大学長の特別授業（宇宙）を1時間実施する。	9時間
17年度	選択教科の探究理科講座ならびに総合的な学習の時間として北宇治中学にて行なう。	物理・化学・生物・地学を各3時間、総合理科として計15時間（3時間×5クラス）実施する。	27時間
18年度	選択教科の探究理科講座として北宇治中学校にて行なう。一方、総合理科としての授業は、京都教育大学で実施する。	物理・化学・生物・地学を各3時間、総合理科として3年生全員（5クラス）が自由に選択した10講座（理学科以外の講座を含む）を受講。これを2回実施する。	52時間
19・20年度	選択教科の探究理科講座で実施。総合理科は京都教育大学で実施。	同上	52時間
21年度	選択教科がなくなり、3年の「総合的な学習の時間」を使い北宇治中学校にて行なう。また総合理科は、前年度と同様に京都教育大学で実施する。	3年生全員（5クラス）が総合的な学習の時間として各3時間実施する。また総合理科として京都教育大学で同学年が自由に選択した10講座（理学科以外の講座を含む）を受講。これを2回実施する。	52時間

■電気回路を学ぼう：センサーについて学び作成する実験（物理領域）

デジタルマルチメーターや電気回路の基本を学習し、ブレッドボードについて学び、簡単な回路を作成した後、センサーの仕組みを学習する。班ごとに抵抗値を変えて、熱センサーを作成する。各班の実験結果から熱センサーと抵抗値との関係について考察するなど、探究的な方法で抵抗の違いがセンサーの働く温度を決定していることに気付く学習を行う。

■梅干しの化学：梅干しから食塩を取り出す実験（化学領域）

梅干しから食塩を抽出する方法を、いろいろな方法を考えながら、探究的な活動を通して自分達で見つけ出す実験。自分達で話し合いながら試行錯誤の中で実験を進めていくのが特徴。

■鉱物の特徴を学ぶ：鉱物薄膜と偏光板を使った万華鏡の作成（地学領域）

岩石を構成する鉱物について理解する。偏光板の特徴を学び、岩石の薄片標本を偏光顕微鏡で観察する。そして岩石を構成する造岩鉱物の特徴について実物を分類する。最後に、生徒自身が偏光板を使った観察器具（偏光板を使った鉱物薄膜万華鏡）を作成し、造岩鉱物を観察してみる。鉱物と偏光板による干渉色の違いを観察することで岩石や鉱物についての興味・関心を高める。

■イモリの誕生：イモリの生態や発生学の基礎を学ぶ（生物領域）

イモリの誕生と題して、イモリについての基礎実験を行う。まず、イモリの生態について調べる。そして生物とその生物が生息する環境との関係について説明を受け、イモリの親の観察を行う。雌雄の区別の識別や生殖における内分泌系の働きについて観察する。次に雌にホルモン注射を打つことにより産卵を誘発する。また、すでに産卵された卵が分割していく様子を観察する。最後に、分割していく様子を早送りで撮った映像を見て成長の様子を学ぶ。

■地震について学ぶ：コンピュータを使った地震についての基本的な実習（地学領域）

最初に地震計のしくみを、実際に地震計にふれながら理解させる。次に地震のメカニズムについて、実際の地震のデータをいくつか与え、地震波の分析を実際に行う。さらに分析させる中で、地面の隆起や沈降の地図を完成させ、その原因について考えさせる。具体的には、断層のずれの方向を見つけ出させ、その圧力の向きを導き出し、その圧力の原因について考えさせる。最後に実験モデルを見せながら地震の不思議について考える。

■分析化学実験、水の分析：いろいろな種類の水を分析する（化学領域）

講座内容 分析化学の方法を使って身近な物質の分析を班ごとに分かれて行う。具体的には探究的な方法を使って、班ごとに試行錯誤しながら、いろいろな実験器具やパックテスト等を使って水溶液の成分を分析する実験を行う。最後に大学生が演示実験を行い化学のおもしろさを伝える。

■チョウの観察実験：アゲハチョウの生態と産卵実験（生物領域）

アゲハチョウを中心としたチョウの生態に及び花との関わりの歴史について講義し、実物のチョウを使ってえさやり等の実習を行う。アゲハチョウの特徴をグループ内で話し合い発表する。アゲハチョウの生態および産卵について講義を受け、その後、各グループで偽りの葉を使って、その葉に卵誘発物質を塗り、そこに群がるチョウの様子や産卵の様子を観察する。最後に、本時の学習内容を整理し生徒の感想を発表させる。

4. おわりに

北宇治中学校と京都教育大学との連携は今年度で6年目を迎える。SPPの取り組みは、中学生にとっては「本物にふれる」という意味ではとても貴重な体験になっているとともに、生徒の感想の中に理科（科学）に対する興味・関心の高まりを感じることができている。生徒の中には、この体験を通して、その後の進路選択にもつながる者もここ数年で出てきている。このSPPによる授業体験が、生徒たちの中にある科学の芽を大きくしているといえるだろう。現在では、中学3年生全員がこのSPP授業に参加できているが、そのことは非常に素晴らしいことであり意味深い。また大学側としては、公立中学校の様子や現在のありのままの中学生を知る絶好の機会ともなっている。このように今日では、北宇治中学校と京都教育大学での中・大連携の取り組みはある程度軌道に乗りつつある。今後は、時代の変化とともにこの取り組みをさらに発展させ、深く強固なものとするとともに、この経験を礎として様々なかたちでの連携を考えていく必要があるだろう。

教員研修モデルカリキュラムの開発研究 —京都市との連携プロジェクトに現職大学院生が頑張っています—

副学長・理事（前 附属教育実践総合センター教授） 岡本正志

教育実践総合センターでは、この4月から京都市教育委員会と連携して「教員研修モデルカリキュラム」の開発を開始しています。これは、「独立行政法人教員研修センター」が全国に公募して教員研修モデルプログラムを開発しようとしているもので、私たちのプロジェクトもこれに応募して採択されました。

実施・運営には教育実践総合センターだけでなく、京都市教育委員会、理学科の谷口和成研究室や京都・桃山の附属中学校、立命館大学、香川大学、平安女学院高校などの先生方にも協力していただいています。大学院生として私の研究室の高橋信幸さん（府立高等学校・教諭）と谷口研究室の米平有里さんにも参加してもらっています。高橋さんには、現職の高校教員として企画および研修講師として中心的に関わってもらっていますし、米平さんには、企画時の記録や研修時のTAとして活躍してもらっています。

お二人に関わってもらっているのは、お二人の修士論文のテーマが、英国で開発されたCASE (Cognitive Acceleration through Science Education) プログラムに関するもので、これを今回のモデルカリキュラム開発の基本的な考え方として利用しているからです。この研修を通して、英国で開発されたプログラムをわが国で適用する場合の問題点や改善点を明らかにし、日本版のプログラムを開発することを目指しているのです。

最近、わが国でも学力論議が盛んに行われ、学習指導要領の改定に伴って、習得、活用、探求などという言葉が飛び交っています。しかし残念ながら、学習者の認知状況を的確に把握した上で、どのような授業を展開するのか、十分に整理されていないように感じます。

英国では、中等教育理科のカリキュラム改革などが積極的に進められていますが、それとは別に、かなり以前から学習者の認知レベルを的確に捉え、それを促進させるカリキュラムの開発と実践が進められてきました。それが、今回われわれが参考にしているCASEプログラムなのです。

このプログラムは、11歳から14歳までの生徒を対象として具体的思考操作から形式操作的思考へと認知発達を促すもので、ピアジェ学派の認知的葛藤と平衡の考え方、及びヴィゴツキー学派の社会的構成と自分

自身の思考を発達させることに関するメタ認知的反省の考え方を理論的背景としています。1980年代から90年代にかけて様々に検証されてきましたが、科学の成績をあげることに貢献しただけでなく、同時に英語などの成績をも向上させることが確かめられて注目されてきました。図1と2はそれを示すグラフです。

図1は、1999年のGCSE「科学」の調査（中学終了段階の全国学力調査）結果と中学校新入生の成績とを比較したデータです。●がCASEを実施した学校、○がそうではない学校を示しており、横軸は中学校入学時の科学の成績、縦軸はGCSE科学の結果です。図から明らかなように、入学時の成績に関わらず、CASEを実施した学校の方が中学終了時のGCSE学力結果が高いことが分かります。図2は、同様な比較を「英語」でも行ったグラフで、「科学」と同様にCASEを実施した学校の成績が高くなっている様子が分かると思います。つまり、このプログラムが「科学」の場合だけでなく、他の教科にも大きな影響を与えていることが理解できるわけです。

CASEは、わが国ではまだごく一部で知られているだけで、京都教育大学の岡本研と谷口研、香川大学の笠潤平准教授の研究室などが共同で研究しています。香川大学の笠潤平さんは、英国ロンドン大学で

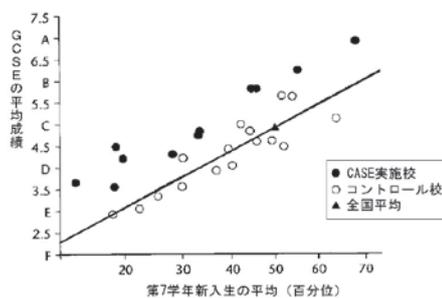


図1 科学の成績

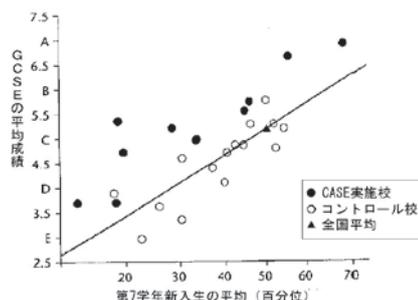


図2 英語の成績

CASEの開発者P.Addey博士の下で研修を受けた後、私の研究室の大学院生としてCASEの研究を行いました。現在の日本のCASE研究の第一人者です。私や谷口さんは、彼の研究を通してCASEについて知り、彼が香川大学に赴任してから共同研究を続けています。

やがて私の研究室に高橋さんが院生として来られましたが、高橋さんは院生として入学する前に私のゼミでCASEを知り、それを高校教育に活かしたいと思われて研究テーマにされました。実際に高校の物理受講者に対してCASEのいくつかのモジュールを実践されて成果をあげておられます。彼の研究を通して、CASEのプログラムは、内容によっては高校生にも有効であることが確かめられてきました。

上述したように、このプログラムは具体的思考操作段階の認知レベルを形式的思考操作段階に引き上げることを目的としていますが、それは学力が低いといわれる生徒達の認知発達レベルがまだ形式的思考操作段階にまで達していないために、学習が困難になるのだという仮説に基づいています。たとえば、具体的思考操作段階の生徒の場合、変化するものが1つや2つ程度なら理解が容易ですが、3つ以上になると理解が困難になります。その場合教師は、「あいつは頭が悪い」と思いがちですが、じつは学習内容が認知レベルに合致していないために生じたことなのかもしれません。

生活年齢はすでに中学生や高校生に達していても、それまでの生活経験など様々な理由によって、形成されている認知レベルがまだ具体的思考操作段階に留まっている場合はありうるわけで、そうした場合にその認知レベルの方をサポートして促進してやれば、理解力が高まり学力にも反映することになるわけです。高橋さんは、高校でも認知レベルの調査を行い、学力が低い生徒の認知レベルがまだ低い状態であることも確かめました。Addey博士らの仮説は日本でも有効である可能性が高まったわけです。

表1 日本の高校生に対する認知レベル調査結果

クラス	認知段階	人数	段階の名称
文系	2A	2	早期具体的操作段階
	2A/2B	2	中期具体的操作段階
	2B	8	後期具体的操作段階
	2B*	7	過渡的段階
	3A	2	早期形式的操作段階
	3A/3B	0	中期形式的操作段階
	3B	0	後期形式的操作段階
理系	2A	1	早期具体的操作段階
	2A/2B	0	中期具体的操作段階
	2B	2	後期具体的操作段階
	2B*	4	過渡的段階
	3A	0	早期形式的操作段階
	3A/3B	2	中期形式的操作段階
	3B	0	後期形式的操作段階

表1は、高橋さんによる高校での認知レベル調査の結果です。調査は英国で使っている調査問題を翻訳してそのまま使用しています。結果は、具体的思考操作の段階の生徒が存在している可能性があることを示しています。調査では、認知レベルを、早期、中期、後期などと細かく調べていますが、要するに、2A、2Bなどのように2が着いているレベルは具体的思考操作段階であり、3Aや3Bなどは形式的思考操作の段階であることを示しています。したがって、理系・文系を合わせて、全30人中15人ももの具体的操作の段階だと思われる生徒がいたこととなります。また過渡期的のもの11人を除くと、完全に形式的思考操作の段階に移っている生徒はわずか4人、13%にすぎないということになります*1)。もっとも英国の調査問題が日本にそのまま適用できるかどうかは検討しなければならないことですから、この結果をそのまま認めてよいというわけにはいきません。しかしこれほどではなくても、十分にありうる結果だと思います。

高橋さんの他には、立命館高校や平安女学院高校、香川大学附属中学校、倉敷天城中学校などで学校教育の中に取り入れた実践が行われていますが、現職教員の研修プログラムとして開発するという試みは、わが国で初めての試みです。理数教育の充実を図るための教員研修に新しい方法をもたらすものだと思います。谷口先生や笠先生を初めとして開発に貢献して下さっている多くの先生方と二人の大学院生に感謝したいと思います。

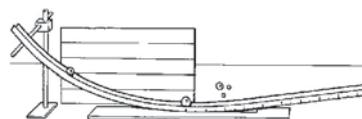


図4 転がるボールの実験器具 (CASEのモジュール例)

*1) 高橋他「CASE授業実践の結果と課題－英国CASEカリキュラムの高校での実践について」、日本理科教育学会2008年度全国大会、発表要旨集、2008

ハノイ師範大学での障害児教育教員養成に参加して

発達障害学科講師 丸山 啓史

今年の3月16日から20日にかけて、ベトナムのハノイ師範大学で5日間の講義を担当するという経験をしました。立命館大学が取り組む「JICA草の根支援技術協力事業」の一環で、障害児教育の教員養成コースで十数人の日本人講師が授業をするうちの一人として行きました。外国で講義をするのも、通訳を介してコミュニケーションをするのも、初めてのことでした。この講義のことを中心に、障害児教育をめぐる日本とベトナムとの交流の経過や、ベトナムにおける障害児教育の様子について紹介したいと思います。

1. ベトナム・ドクさんとの出会いから

1980年に京都ベトナム障害児教育調査団が訪越したことが、今回のプロジェクトのルーツになっているといえます。1981年の国際障害者年を前にして、ベトナム戦争による障害児者の発生状況や、ベトナムにおける障害児者の医療・教育・労働の実態を知る取り組みがされました。その後、その調査団の団長だった藤本文朗氏（滋賀大学名誉教授）を中心に、結合双生児として生まれたベトナム・ドクさんの支援が始まります。ベトナム・ドクさんのように、ベトナム戦争時に米軍が散布した枯葉剤の影響と考えられる障害のある人が、ベトナムでは現在でも生まれ続けていますが、そのような枯葉剤被害の問題にも日本の関係者は少なからず取り組んできています。

一方、1992年には「日本ベトナム友好障害児教育・福祉セミナー」が始まり、日本の関係者が毎年ベトナムを訪れ学び合う活動が続けられています。私も2007年のセミナーに参加しましたが、最近数回は、「サービスマーケティング」ということで実際にベトナム



の障害のある子どもたちとともに活動する試みがなされてきました。

このような取り組みと絡み合いながら、ベトナムにおける障害児教育の教員養成に協力するプロジェクトが実施されています。

2. ベトナムでの障害児教育教員養成

ベトナムでは障害児教育が整備されているとはいえないのが現状です。学校に通うことのできていない障害のある子どもも少なくありません。しかし、障害のある子どもの教育の充実に向けた努力が徐々になされてきていることも事実です。2000年頃から、ハノイやホーチミン市で、障害児教育に専門的に携わる教員の養成も始められています。

そのような流れのなかで、ハノイ師範大学における障害児教育の教員養成に協力するという形で今回のプロジェクトが実施されており、私もそこに参加することになったわけです。教員養成コースの「学生」の多くは、既に障害児教育に携わってきている「先生」でした。20歳代から30歳代の人々が中心で、ベトナムの障害児教育の今後を担っていく人たちだと思います。その人たちと講義を通してやりとりすることは、ベトナムの障害児教育について知ることでもある、貴重な経験だったと思います。

3. ベトナムの障害児教育

私が担当した科目は「個別教育計画」というタイトルのもので、あまりタイトルにこだわらず、日本の障害児教育が培ってきた視点・文化のなかで特に伝えたいと考えることを中心に紹介しました。



その中身の一つが「教師自身が一人ひとりの子どもの理解に基づき教育を組み立てる」ということなのですが、初日の講義の後で「日本の障害児教育に“スタンダード”（準拠する基準）はないのか。それを読みたい」「日本の個別教育計画の実例を具体的に知りたい」と何人かに言われたときには少し驚きました。関心をもつのは当然だと思うのですが、「その内容をベトナムの子どもに試してみる」というのです。「学習指導要領はあるけれど…。教育課程の自主編成も主張されてきたし…」などと話しながら、内心とまどっていました。マニュアル化された既成の手法をそのまま障害のある子どもに適用する、という発想を強く感じたからです。

今回の授業の一環で学校・施設の見学をして実際に目にしたことでもありますが、ベトナムでは教育省が示す基準（スタンダード）にかなり忠実に教育が実施される傾向があり、障害児教育も例外ではないようです。パッケージ化された指導内容・指導方法への依存が強いように思えます。障害のある子どもが通うある施設では、英語の本を見せられ、「米国の〇〇法を実施しています」という説明を受けました。そこでは、英語が書かれたカードをそのまま使用している場面もありました。優れたものであれば吸収すればいいわけですが、米国とたたかって独立を勝ち取った国で、米国の療法が無批判に輸入されているように見えて、複雑な思いでした。

また、「教え込む」というスタイルの指導も、ベトナムで違和感をもちながら接したものの一つです。障害のある子どもと先生が机を挟んで一対一で指導がされるところを多く見たのですが、先生は、たとえば「先生の名前は何ですか?」「このボールの色は何色ですか?」というような脈絡を感じにくい質問を重ねます。そして、子どもがよそ見をしたりすると、机をバンバンと手で叩きます。これでいいのだろうか、とってしまう場面でした。

とはいえ、日本は進んでいてベトナムは遅れている、ということが言いたいわけではありません。ベトナムの障害児教育について否定的な印象を書いてしまいましたが、ベトナムの関係者の熱意や、ヒューマンな雰囲気を感じて帰ってきたことも事実です。見学で訪問した小学校では、一つの教室を活用して障害のある青年・成人の「クラブ」が自主的に続けられてきていることを知りました。メンバーは障害のある子どものための学級や施設の出身者が多いそうです。絵を描く、写真を撮る、服を作るといった活動をしているとのことで、部屋には作品が飾られていました。また、教員養成コースの学生さんたちと日本の養護学校の様子を撮った記録映画を観たのですが、子どもたちの仕草や行動への共感の笑い声が何度もありました。一見すると大変そうな、障害の重い子どもでも、学生さんたちの多くは「かわいい!」という表情で見ます。そういう教室にいて、子どもたちや教育への思いが伝わってくるような気がして、私も何だかうれしい気持ちでした。ベトナムの障害児教育が今後どう展開していくのか分かりませんが、良いものになることを願っています。

なお、最後に、ベトナムに関連して私が学内でしていることを述べると、担当している「障害児教育史」の授業のなかで、枯葉剤被害による障害の問題や、ベトナムの障害児教育の様子について、少し時間を割いて紹介しています。また、枯葉剤被害の現状を追ったドキュメンタリー映画『花はどこへいった』（坂田雅子監督）を観る会を学内で企画しています。目の前にある日本の障害児教育の課題を考えることはもちろん大切ですが、戦争と障害との関係、いわゆる発展途上地域における障害児者や家族の状況、それらと日本に住む私たちとの関係について考える時間を、ぜひ学生時代にもってもらえたらと思っています。



「雀の学校」をめぐって —教育の文化的遺産の継承を考える—

国文学科教授 植山俊宏

一、「雀の学校」にまつわる誤解

ちいちいぱっぱ ちいぱっぱ
雀の学校の先生は
むちを振り振り ちいぱっぱ

生徒の雀は 輪になって
お口をそろえて ちいぱっぱ
まだまだいけない ちいぱっぱ
も一度一緒に ちいぱっぱ
ちいちいぱっぱ ちいぱっぱ

「雀の学校」という童謡の歌詞である。作詞は、清水かつら、作曲は広田龍太郎。大正10年に『少女号』という雑誌に掲載された。現代においても人気がある童謡である。

この歌詞について、以前私は、次のような解説文を書いた。（『童謡』世界思想社1998年）

この歌は、よく教員採用試験にとり上げられた。めだかの学校と雀の学校の先生のどちらがよいか。雀の学校の先生は暴力的だということで分が悪く、いわば悪教師の見本のように言われる。しかし、この歌詞をよく見てみると、むちを振っているが、これは、おそらく一年生であろう雀の生徒たちに指示を出す教具（音楽の時間ならタクト）として用いているのであって、別にそれでたたいているわけではない。つまり、これは大正年間の授業の最も典型的な光景を雀に置き換えただけ。（後略）

思い込みというものがある。戦前の教育は、軍国的、徳目的であって、児童生徒に対して権力的な指導が行われていたという観念である。太平洋戦争下の高圧的、封建的な教育の姿をもって、戦前の教育の全てを否定しようという考えである。事実、そのような傾向はあった。が、全てがそうであったかということになると、それは誤りというしかない。

この「雀の学校」は、戦後ただ単に「むち」を持った教師というだけで、暴力教師のように見られてきた。うまく歌えない児童（歌詞中では「生徒」）をむ

ちで叩いて指導している光景が描かれているとしてきた。しかし、この歌詞の「むち」は、いわゆる「教鞭」であって、体罰の道具ではない。ひたすら「生徒」の声を合わせようと悪戦苦闘する教師の姿がある。思い込みで歌詞を読むと本来の意味からかなり外れた勝手な解釈が成立してしまい、それがある種の思想（戦前の教育を否定しようとする考え方）に利用されてしまうのである。

二、「童謡」の誕生

この歌は「童謡」とよばれる性格のものであって、「唱歌」ではない。戦前において、「唱歌」は、いわゆる官製の「文部省唱歌」を指す。「童謡」はそれに対して民間から発生した。官と民の対立の構図そのままということができる。事実、童謡はある文化運動として起きた。官製の「唱歌」が古臭く、徳目的だとして、もっと子どもの側の視点、心の動きを反映した詩を表そうと、鈴木三重吉が企画し、当時の多くの文化人がそれに賛同した。大正7（1918）年のことである。第一次世界大戦による大好況を背景に、経済的、文化的に高揚した時期であった。

三重吉は、児童雑誌『赤い鳥』を創刊し、「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」を展開した。この月刊誌の中に童謡のコーナーが設けられ、近代的な童謡が創作、提供された。担当は、北原白秋。三重吉の依頼により童謡の創作・発表のほか、投稿作品の選者として活躍した。初期の代表的な童謡として、「雨」（北原白秋）、「赤い鳥小鳥」（北原白秋）、「かなりや」（西條八十）、「あわて床屋」（北原白秋）、「からたちの花」（北原白秋）などがある。『赤い鳥』の影響を受けて、児童雑誌が陸続と創刊され、それぞれ童謡を掲載した。

童謡というと音楽の分野という印象であるが、当時は童謡詩と呼ばれ、まず詩が発表された後、人気が高くなると曲が作曲された。「かなりや」の詩の発表は、大正7（1918）年だが、曲がついたのは翌大正8年である。多くの童謡詩が発表されても曲が付けられるのはほんの一握りであり、多くは歌われることがなかった。また今でこそ有名な金子みすゞの詩は、みすゞ生前には曲が付されることはなかった。

三、童謡運動その後

童謡運動は、その後勢いを得て大いに高まっていくが、大正12（1923）年の関東大震災で壊滅的な打撃を受ける。東京の出版社自体が大きな被害を受けたこともあるが、首都圏の購買層の被害も大きく、雑誌が売れなくなったからである。そのころの童謡の流行に関して興味深いエピソードが伝えられている。当時、大半が焼出した東京の市街からは日暮れ時に夕焼けがよく見えたという。ちょうどその時期に発表された「夕焼小焼」は子どもたちの間で歌われ始め、広まっていったという。この詩（譜面も掲載されていたようである）が掲載された『あたらしい童謡』の7月号は、発表後震災に見舞われ、焼け残ったのはわずか十三部であったとのこと。その十三部から「夕焼小焼」は国民的愛唱歌になっていくのである。

童謡が広く歌われるようになるのは、昭和期に入ってからである。レコードを聴く蓄音機自体は明治時代後期に日本に輸入されていたが、操作が難しい上に価格も高く、大衆的なものとはなっていなかった。昭和期に入り、蓄音機は発達し、操作も簡便になり、価格も大衆の手の届くところまできた。かくしてレコード童謡の時代を迎える。「うれしいひな祭り」（サトウハチロー）、「かもめの水兵さん」（武内俊子）、「かわいい魚屋さん」（加藤省吾）、「おさるのかごや」（山上武夫）、「リンゴのひとりごと」（武内俊子）などがある。これらの歌は、レコード遊戯として歌いながらよく踊られた。

四、『赤い鳥』と「ごんぎつね」

『赤い鳥』は、童謡ばかりでなく、新作童話を掲載した。童話の方が主力であったといってもよい。今でも伝えられているものには、「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）、「杜子春」（芥川龍之介）、「一房の葡萄」（有島武郎）などがあり、これらの作家のほか、森鷗外、島崎藤村なども童話作品を提供している。また一般投稿も受け付けており、童話作家を目指す人が作品を寄せた。

「ごんぎつね」は、新美南吉が『赤い鳥』に投稿し、同誌の昭和32年1月号に掲載された作品である。その「ごんぎつね」は、南吉の投稿した原文（「権狐」）そのままではなく、編集段階で相手が加えられたことが戦後の研究により判明している。現在、小学校国語教科書に載せられているのは、編集後の「ごんぎつね」である。編集担当者は巽聖歌。彼も童謡「たきび」の作詞者として著名である。当時南吉は19歳。その後、「おぢいさんのランプ」、「手袋を買いに」、「牛をつないだ樫の木」などを発表したが、29歳で夭折した。

五、教育の文化的遺産の継承

「雀の学校」、そしてそこから広がる童謡詩を少し追いかけてだけでこれだけの世界が見えてくる。教育において、戦前が不毛で、戦後から本当の教育が始まったという図式論がある。それがいかに愚かな把握かということがとらえられるであろう。もちろん、図式論を批判しているのであって、戦前賛美ということではない。戦前からの文化的財産の継承として教育を的確にとらえようというのである。

「雀の学校」にまつわる誤解は、その詩を飛び越えて、戦前教育に対する固定観念から解釈が行われ、それが広められたところから始まっていたのである。

六、むすび—学縁、学恩—

私は、説明的文章指導の研究を三十年来続けている。かたや、短歌を作っており、ささやかながら文学創作にも手を染めている。かつて、本学に在職した坪内稔典氏は、著名な俳人であるが、彼から「国語教育を研究している人は、自分で作ることがなく、人の作ったものに文句を言う」といわれたことがある。この文句というのは、批判ということではなく、過剰な解釈を行って、児童・生徒を深みにはめているという意味のことである。なるほど自分で作ってみると、そこまでの意図でことばは使用していないのに、そしてそのことばはそこまでの動きをしないのに過剰に深読みされるという経験をすることがある。坪内氏はそのことを指摘してくれたのである。学縁、学恩と受け止めている。

このことは、童謡についてもいえる。以前本学に在職した糸井通浩氏（現京都光華女子大学教授）から勧められて、童謡詩の解説の仕事に携わったのがきっかけで、本業の説明的文章指導の研究の他に、童謡詩や童謡運動の研究の道にも踏み込むことになった。この世界は、市販雑誌という商業的な側面、曲と一体となって始めて作品が歩き出すという音楽的な側面などがあり、到底私の手に負えるものではないという実感がある。ただ、童謡の歌詞（童謡詩）を詩として分析してみると、意外なまでに詩の世界は解明されていないことが見受けられた。本来的に童謡は詩であるのに、詩の内容を十分に理解せず、すぐに「歌」ってしまうのである。ことばの解釈という営みの奥行きを実感しつつ、この仕事に携わっている。これも学縁、学恩である。

これらの学縁、学恩は、偶然のように見えて、実はそうではないだろう。京都教育大学が担ってきた文化的遺産の継承の一つと考えたい。

夢に向かって

教育学部 教育学専攻4回生 鄭 雪 蓮
テイ セツレン (中国吉林省延辺出身)

教師だった母の影響を受け、自分も教師になりたいと思い、そして歴史と伝統の都・大学の町京都で続けて学びたいという思いから、京都教育大学を志望しました。

一回生の時の「公立学校等訪問研究」という授業では、京都市内の学校および教育関連施設を訪問し、大変視野が広くなりました。2回生の時の「附属学校参加研究」という授業では、附属小学校のクラブ活動に参加させていただきました。料理クラブで先生の手伝いをしながら、子どもたちと一緒にケーキやお菓子を作りました。3回生になり、一ヶ月間附属小学校で教育実習を受けました。始めは、日本人でもない私がどうやって教育実習を受けることができるだろうと悩み、不安もありましたが、大学の教授、実習先の指導先生や留学生担当の方々に支えられ、楽しい実習を終えることができました。子どもたちに「先生」と呼ばれるなんて本当に不思議でした。実習中は、理科、国語、道徳などの授業を行い、中国との比較をしながら子どもたちに教えました。放課後は子どもたちと面白い外で遊びました。最後の公開授業では道徳の授業として、中国の文化を教えました。子どもたちはとても興味津津で、きらきらする目で授業を受けていました。チャイナドレスや中国の遊具であるゼンズを持ってきて、子どもたちに触らせました。子どもたちはとても喜んでいて、授業が終わっても教室を離れようとしなかったです。そして中国の学校の様子や、私が生まれた故郷の農村の学校の様子について話しました。中国では貧富の格差が大きくて、農村では学校がなくなっていくという状況について話しながら、自分の夢はクリスチャンとして村に教会を建て、そこに子ども学校を作ることだと語りました。最後のお別れ会ではある子どもから「先生、中国の村に学校を建ててあげてくださいね。」と励ましの言葉をもらい、本当に感動しました。このように授業だけではなく、実際に子どもたちとふれあいながら教師になるための勉強ができるというのがとても魅力だと思います。

私は日本語学校の時からずっとアルバイトをしてきました。中国と日本の物価の差が大きくて、中国の親

に大きな負担がかかっていたので、できるだけ自分で生活費を稼ごうと思ったことと、アルバイトをすることによって日本語を学び、様々な経験ができるからでした。それは今でも私の人生に大きな影響を与えています。1、2回生の時は、授業の時に居眠りをすることもありました。その時には、担任の先生や授業担当の先生に呼ばれ「教育」を受けては新たな決心を下したり、時にはなぜ私はここまで頑張らないとダメなのか、留学生だから日本人と同じく要求するのは厳しすぎるのではないかと不満に思ったりすることもありました。しかし私はだんだん自分の考えを変えました。私には夢があるのではないかと。今苦労しているのは自分の良い未来を創る過程なので、ここで落ち込んではいけなかったのです。そして、その時からまた自分を一人の留学生として見るのではなく、日本人と同じ学生として見ることができました。勉強と仕事の両立というのがいかに難しいことなのか、自分の体で体験したので、今振り返ってみるとよく頑張っていたなあと思うぐらいです。

そして留学生たちは主に国際交流会館に住んでいます。とても快適な環境で、留学生たちはいろいろな交流を通してお互い絆を深めています。また留学生とフェローが自治会を作り、年間様々な交流会やイベントを計画しています。同じ専攻の日本人との交流はもちろん、世界各国から来た留学生たちと教育について比較し、語り合えるのも京教ならではのことだと思います。

私は本当に毎日が充実していて、「この大学を選んで本当に良かった」と思っています。今は卒論に向かって、また大学院を目指して頑張っているところです。卒業を眼の前にして日本に来て、またこの大学で得たことはかけがえのない貴重な経験だったと胸張って言えるよう続けて努力をしていきたいと願います。

幼稚園で何を学んでいるの…？

附属幼稚園副園長 鍋島 恵美

本園は、大学のある京阪墨染駅から一駅大阪よりの丹波橋駅を下車し、桃山城を正面東方向に見てすぐに位置しています。園庭のまん中にそびえる母なる大銀杏がシンボルです。東隣に



附属桃山中学校、丹波橋通りを隔てた向かいに附属桃山小学校があります。卒園したこどもの大半が両学校へと進んでいます。幼子が成長する姿が見守れる良さが附属にはあります。が、幼稚園教育は今危機を迎えています。少子化現象に加えて、女性の社会進出に伴い長時間子どもを預かってくれる保育所（園）のニーズが高まっているのです。ここ10年もすれば、公立幼稚園は今のままでは消えてしまうと言われていま

す。幼稚園教育も新たな方向性を見据えつつ、こどもの視点にたった大切なことを今以上に言及していく時を迎えているのです。その使命が国立大学の附属幼稚園に求められています。ここでは、みなさんに本園の幼稚園教育の有り様の一端をお知らせしつつ、幼児教育の意味について一緒に考えていただければと思います。

【通園バス・給食のない幼稚園 その魅力】

「おはようございます」と、3歳児から5歳児までのこどもたちが、家庭から幼稚園へと公共の交通機関を



使ったり歩いたりして、親と手をつないで幼稚園にやってきます。通園バスはありません。給食もありません。親の手作り弁当を持ってきます。“白いエプロン”が制服です。“親子で手をつないで歩く”“手作り弁当”って…？皆さん思い出してみてください。

何歳ぐらいまでしてやったり、してもらったりされましたか？目を閉じると記憶がよみがえってくるでしょうか？その記憶と共に沸き立つ感情こそが、その人にとってかけがえのないものです。毎朝幼稚園にやってくる親子を迎えていますと、いろんな手のつなぎ方と歩き方があります。その日の様子がうかがえる一つ的情景でもあります。

【自分の名前と出会う 文字への興味・関心】

家庭では自分の名前がついた下駄箱や整理棚を使っておられるでしょうか？幼稚園は、こどもが初めて出会う集団教育の場です。家庭から社会へとつながる場所です。家庭にはなかった生活環境との出会いが始まります。こどもは文字が読めません。発達上当たり前



のことですし、幼稚園教育要領（文部科学省告示）の指導内容の取り扱いでも読めることがねらいではなく、「数量や文字などに関して

は、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること」と明記されています。入園式を前に、先生たちは新しく出会うこどもひとりひとりの顔を想像しながら



らひらがなで下駄箱や整理棚に名前を付けていきます。3,4歳児学級では、動物や花などの絵のシールを個々に決めて名前と共に付けています。名前の読めない

こどもへの配慮であり、そこから文字への興味・関心へと広がるようにと意図しています。こどもはそのシールを探しつつ、「よく見る、違いを比べる、位置を知る」等いろいろな知恵を働かせて覚えていきます。5歳児になると名前だけになったり、数字で表記されたりする所も出てきます。生活環境の中で必要感に応じて使って習得しています。文字や数字のみを切り取って教えることは、幼児期にふさわしい教育ではないことがわかりになると思います。

【家庭から幼稚園へ 自立・自律のとき】

愛されて育った家族から離れて、こどもは幼稚園の門をくぐります。新しい園舎が自分にとって安心できる



ところか、自分の居場所が見つかるころか、こどもたちの不安は大きいものです。おとなの皆さんも新たな環境に出会うときは、やはり一抹の不安や緊張感を抱かれるのではないのでしょうか？

こどもが安心を感じる最初の人は、先生です。3歳児は、身辺自立の介助を必要

とすることも多いです。先生は、母親恋しくて泣き出すこどもを片腕で抱き留め、他のこどものおしっこ世話、と入園当初は慕われて大忙しです。自己主張が盛んな4歳児は、何人ものこどもたちの中で、先生に自分の話を聞いてもらおうと他のこどもと向き合っている先生の顔を、自分の方に両手でぐっと引き寄せます。先生の首はあっちにこっちにとどの子のお話も受けとめようとくるくるします。私たちの園舎は2階建てで、園内で最年長となる5歳児は2階に保育室があります。5歳児になる第一日目から親と別れ、その階段を振り返ることなくあがっていきます。送ってきた親は、その我が子の姿に接して成長の証を感じると共に、一抹の寂しさも味わうようです。先生（おとな）から友だちへと信頼感を広げていきます。

【数の限られた施設や遊具 わたしとみんな】

家庭での、自分だけの物に囲まれていた環境から考えると、幼稚園はずいぶん違ってきます。大好きな遊具であっても、いつも自分が使えるとは限りません。こどもの好きなブランコや遊動円木を巡ってこんなエピソードがあります。

■エピソード 4歳児 6月「もうええわ、代わるわ」

遊動円木にMDとYKが運転席に立って漕いでいる。TT「かーわって！」と何度もMDに言うが、代わらず。TT「次の駅で代わってや！」MD「あかん！」（駅という言葉から構内を連想してか）YK「駅の階段下りてや！」乗客として乗っていた実習生「わかった！」と言って、電車が止まると



一度降り、その場で階段を降りる動作をすると、TTも笑いながら同じようにしている。NTが「おいで」と自分が座っている前の席を指してTTに言っているが、TTは乗らず。

MD「YKちゃん、YKちゃんは遅くしてな、MDが早くするし」と言うが、遊動円木の両端にMDとYKはおり、しかもMDはYKの背中から声をかけているのでYKの耳には届いていない。その間にTSとIMが乗りに来る。MDは一度そこを降りてYKに話しかけに行くと、IMがそこに乗る。IMにTT「かーわって」と言うと、IMはそこを降り、TTが乗る。しかしそれに気づいたMDが慌てて戻ってきて「だめよ！勝手に乗ったら！いいよって言わないと！」と言うとTTは素直にそこを降りその場から再び見ているが、YKが突然「ジャンピング〜！」とおちよけるように言うと、それを見て笑う。しばらくすると、YKがTTの持っている手裏剣に気づき、YK「代わったら手裏剣ちょうだい！」TT「お

兄ちゃんが作ってくれてんで」（大事だからあげたくない…という表情で、手裏剣を引っ込める）YK「シンケンジャー！」（おそらく、手裏剣をもっていることと現在TV放送中のヒーローがつながったのだろう）TT「シンケンジャーの塗り絵持ってるで」YK「（聞き取れず…）」それを聞いてTT笑う。YK「もうええわ、代わるわ」とずっと降りて、TTにそこを譲り、TTもようやく乗れるようになる。

（記録：高野史朗）

遊動円木に運転手として乗りたいTちゃんは、繰り返し交渉しますが、Mちゃんに断られ続けます。Nちゃんからは空いている席に「おいで」と誘われますが、乗りたい場所ではないので断ります。もう一方の運転席に乗っているYちゃんは、冗談を言ったりしながら、なんとなく自分が代わらないことの気まずさを表現しているようです。Mちゃんが、その場を離れた瞬間にIちゃんが乗ります。



それを見たTちゃんがIちゃんに交渉してついに好きなところに乗ることができたのです。が、それに気づいたMちゃんに注意

されて降りてしまいます。すると、YちゃんはTが持っている手裏剣と運転席が変わることを交換条件に交渉を始め、そこから会話はそれまでのものとは違う流れになっていきます。しかしTの兄からももらったものなので譲れないという思いはわかるのか、そのことを聞き入れYちゃんは、「ももええわ、代わるわ」と交渉を諦めて、運転席を譲るのです。園生活を2ヶ月間過ごすなかで環境に慣れ、友だちの思いに気づくようになってくるこどもの成長が見て取れるエピソードです。こども社会の中で遊びを通して「わたし」と「みんな（わたしたち）」という世界を切り開いていくのです。こどもの苦勞がうかがえるのではないのでしょうか？



通園バスではなく、親子で手をつなぎ、親の愛情が伝わる手作り弁当が幼児期には大切なこころの栄養にもなっているのです。

私たちの幼稚園では教師に支えられながら、こどもが自ら環境に働きかけて、「わたしの充実感」と「人がかかわってくること」をどのように自分の中で統合していくのかを、生活を通して具体的な出来事の中で学んでいるのです。このことは、社会人として生きる大事な基盤となる経験なのです。

に組夏休み登校日・宿泊学習

附属京都小学校 に 組 担 任

本校には各学年い組、ろ組、は組の普通学級と、軽度の知的障害の児童が在籍する障害児学級「に組」があります。清掃や給食の日常交流、遠足、運動会などの学校行事などで交流することにより、健常児と障害児がお互いによりよく成長していってくれることを願っています。に組だけの行事として、毎年夏休みには登校日・宿泊学習を行います。1、2年生は宿泊のない登校日、3年生以上はに組校舎での宿泊学習です。

今年は8月4日（火）～8月5日（水）に実施しました。友だちや先生と一緒に楽しく過ごすこと、また、宿泊学習では家庭から離れて過ごすことによって、一日の生活に必要な活動（食事、入浴、身辺整理など）に自分の力で取り組むことを学習のめあてにしています。

家庭の方でも宿泊に向けて、荷物の出し入れ、入浴に関する練習などさまざまに協力していただいて当日をむかえます。

8月4日午前中は、8月のお誕生日会をした後いつものベビープールでの学習とは違い、みんなでメインプールを使って遊びました。深いプールで気持ちよく体を浮かしたり泳いだりしました。

昼食は学校近くのレストランに食べに行きます。他のお客さんもいるので、静かにマナーを守り食事を楽します。普段は食が細いのですが全て食べた児童もいて驚きました。

午後からはチケットをもらい、すいか割り、ヨーヨーつり、金魚すくい、ボールキャッチのゲームをしました。チケットの使い方や出し方もよく理解し、それぞれのゲームを夢中で楽しむことができました。1、2年

生はここまでです。

1、2年生が下校した後、3、4、5年生が協力して夕食作りをします。まずスーパーに食材を買いに行きました。担当した食材を各自見つけることができました。

買い物から帰ってくると調理にかかります。それぞれ分担して子どもたちが食材を切ります。に組の畑で収穫したジャガイモ、かぼちゃも使いました。一人でピッチャーを使いたくさん皮をむき、小さな包丁で切ります。意欲満々、みんなとても上手に皮をむいたり切ったりすることができました。たくさんの量をグツグツ煮て作ったカレーの味は格別おいしかったです。みんなおかわりをして食べました。

夕食の片付けをした後は、いよいよお風呂屋さんに行きます。脱衣場では汚れ物と着替えを間違えずに整理してかごに入れることや、洗い場で体を洗うこと、洗った後のタオルの始末、自分の石鹸やシャンプー、タオルなどの持ち物を間違えずにまとめることなどたくさんの課題を先生と一緒にこなしました。

すっきりとして学校に戻ってみんなで花火を楽しみました。花火に照らされた子ども達は一日の活動を終えとてもいい顔をしていました。

今年の夏休み期間中の子どもたちの活躍について書かせていただきます。

本年度の水泳部は、中学体育連盟主催の夏季大会で団体総合3位、府下大会では『優勝』という輝かしい成果を上げてくれました。夏季大会では、杉本千智友さんが200m自由形で1位大会新、熊本真季さんが400m個人メドレーで1位大会新、府下大会では、熊本真季さんが400m自由形4位、800m自由形で3位、杉本千智友さんが200m自由形で2位、個人メドレーで2位（大会新）、7年生の片山南瀬さんが50m自由形で4位、また、熊本さん、杉本さん、片山さん、宇野さんによるリレーでは、2位（大会新）、熊本さん、杉本さん、片山さん、小林さんによるメドレーリレーでは、3位になり、総合で2位に12点差をつけ優勝しました。また、全国大会では、8年生の熊本真季さんが800m自由形5位に入賞しました。

これらの生徒は、本校の水泳部に在籍しており、放課後には、本校で練習をしています。そのほかにスイミングスクールに通って練習に励んでいます。学校生活との両立は、大変かもしれませんが、自分で決めた道を着実に歩んでいるように思います。

次に紹介するのは、本校の吹奏楽部です。昨年度、初めて吹奏楽連盟主催のコンクールに出場し、銀賞を頂きましたが、金賞との違いを肌で感じて、その後、1年間金賞を受賞することを目標に努力してきました。そして、今年のコンクールでは、見事『金賞』を獲得することができました。金賞を受賞した生徒が書いた作文を紹介します。

私たちは、今年度ステップアップを目指し、技術力

だけでなく、表現力の必要な曲を選んだ。そのために本番までに曲はなかなか仕上がらない現実の中「できるのか」という不安が募り、「今年も感動を届ける演奏をして、金賞を呼びたい」という理想との間で心が揺れ、部活内がまとまらないこともあった。（中略）そして、本番。舞台の上で、自分たちで自分たちの演奏に感動した。本番の日に一番いい演奏をすることができた。演奏が終わった時、「すべて出し切った」「何も思い残すことはない」「やり遂げた」と感じた。言葉にならない思いが溢れてきて、涙が出た。

その後、喜びが湧いてきた。みんなが自然に笑いあった。必ず『金賞』だと思った。もう金賞であるかどうかは問題でさえなかった。大きな大きな達成感をみんなで分かち合うことができた。

最後に京都ジュニア観光大使に選ばれた八木櫻子さんを紹介します。子どもたちが京都について学び、体験する機会をつくる「歴史都市・京都から学ぶジュニア日本文化検定」の認定が230名ありました。この「名人」の中から7名の小中学生が「ジュニア京都観光大使」に選ばれました。八木さんの言葉を紹介し

ます。「和敬静寂」という茶道のとても大切な言葉を通じて、作法一つ一つに理由があり、「和」を大切にしている日本人の心が込められていることを知りました。

「和」には「仲良くする」という意味もあります。私は、「和」をずっと大切に、伝えていきたいです。

まだまだ、いろいろの活躍があると思いますが、子どもたちの個性をのばしていければと思います。

44期 研修旅行 長崎 小値賀島・野崎島への旅

附属高等学校副校長 斉藤 正 治

今回の研修旅行の目的は「京都では日常触れることが少ない生活や自然、文化を体験することや、地元の人々との交流を通して、自己とは異なる生き方や考え方を知り、自らを振り返る契機とする」です。訪問先の中心は長崎県北松浦郡小値賀町の、小値賀島と、そこから船で10分の所にある野崎島です。



小値賀島は五島列島北部に位置します。中国大陸往来の中継地点であり、遣唐使船が多く寄港しています。ピーク時には8000人を超える人口が現在約3000人になっています。この小値賀町の各民家に各3～4名の生徒を家族同様の扱いで泊めていただく(民泊1泊)のです。

予定の、各民家での漁業や農業、牧畜体験はあいにくの天候でできなかったものの、釣り・漁船でのクルージング・島の案内・牛の世話・夕食のお手伝いなどをさせてもらったようです。



野崎島には原生林が残されており、野生のキュウシュウ鹿が600頭以上棲息しています。徳川時代に迫害を受けて隠れ住んだ隠れキリシタンの島でもあります。島の中央部には「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の一つとして、ユネスコの世界遺産(文化遺産)暫定リストへ掲載が決まった野首天主堂があります。この天主堂には熱い信仰の歴史があります。しかし、年々島民が流出し、無人島になってしまいま



た。そこで町は廃校になった小学校を改装して自然学塾村を立ち上げました。この自然学塾村に1泊するのです。

自然体験(カヌー・シュノーケリング・ミニトレッキング・釣り・クラフトなど)をする予定でしたが一部できたのが自然学塾村周辺散策とクラフト(海岸の砂を使っての作品製作)でした。魚さばき体験(自分でさばいたアジをみんな自分で食べました)をしたり、島の自然や歴史のミニ講義などを受けました。

研修旅行の日程は7月23日～27日(佐世保1泊+民家1泊+自然学塾村1泊+船中1泊)。本当に天候には恵まれませんでした。島に渡る船は波に大きく揺られ、ずいぶんつらい思いをさせてしまいました。北九州は大雨。帰京の際、バスの中から浸水の家々や、池と化した田などの光景を目のあたりにしました。大雨や雷などの警報や注意報に耳をかたむけ、空を眺めてばかりの旅行でした。そんな中、予定されていた体験は満足にできなかった一方で、生徒同士や民泊での交流は大いに楽しんでいただいているように思います。また小値賀島・野崎島ともに日本の地方の歴史と現状を教えてください。正に「人があるところ歴史あり」です。京都も日本であれば、小値賀島・野崎島も日本です。将来都会に暮らすことになっても広い視野で日本を、世界を見渡してくれることを願っています。

7月16日～18日臨海学習に行きました。京都府京丹後市網野町浜詰、この住所を聞くだけで、私などは岬が日本海に突き出した風景が浮かびます。小学部5年6年生、中学部1年生、高等部1年生が臨海学習に参加します。小学部からの人は計4回になるわけです。下の日程表は、今年の日付にしてありますが、毎年の大まかな流れは変わりません。

海で学ぶことは、たくさんありますが、浮きやすいということは大事にしたいと考えます。10才から12才まで連続して海に行くことは、水泳指導と相乗効果があります。この時期に水中で力が抜け怖さがなくなった人もたくさんいます。水の中の楽しみを体感する。現在、公営の温水プールが、障害のある人のリクリエーション、余暇活動の場になっております。こ

うした施設を積極的に利用していく前提として、水中が楽しいという感覚が必要でしょう。

一緒に暮らしても楽しい。私は、旅館での食事が一番楽しい。みんな腹ペコで、「いただきます」を待ちます。しばらく、無言の時があり、食べているなーという感じが好きです。高等部の生徒は、ご飯の盛りつけ、洗濯、荷物運び等々で立派に働いてくれます。小学生や中学生とは違う自分に気づく生徒もいます。「数年前の同じような状況下と今の自分」大切な学習の場だと考えます。

同窓会などで卒業生は、「りんかいいったな」、「はまづめいったな」「ブロックまで泳いだ」等々話してくれます。私にも彼らにも同じシーンがあるのでしよう。話が弾みます。楽しく、心に残る臨海学習です。

時間	16日(木)	17日(金)	18日(土)
6時			起床
7時		起床	朝のつどい
8時		朝のつどい 朝食	荷物整理 朝食
9時			
10時	京都駅発	水泳②	水泳④
11時	宮津着宮津発		
12時	木津温泉駅着 旅館着大広間にて弁当	入浴	入浴
13時		昼食	昼食
14時		休憩	旅館屋出発
15時	水泳①	水泳③(磯遊び)	木津温泉駅発
16時			天橋立着発
17時	入浴	入浴	京都駅着
18時	休憩	休憩	解散
19時	夕食	夕食	
20時	班活動	ファイヤー	
21時	就寝	就寝	



理学科准教授 中野英之



4月に着任しました理学科の中野です。着任前は埼玉県の私立獨協埼玉中学高等学校で教諭をしていました。京都教育大へ来たのは2年前、修学旅行の引率の合間に散歩がてら立ち寄ったのが始めてでした。地面に這って蟻の生態を観察していた女子学生の姿がとても印象的でした。

元々の専門は惑星科学で、惑星の材料物質である星間塵の蒸発変成や水質変成について研究しておりました。現在の研究テーマは、天文教育やエネルギー環境教育分野における、「ものづくり」を絡めた教材開発が現在の研究テーマです。技術立国日本の再生に向けて、「ものづくり」に強い教員の育成に微力を尽くしていきたいと考えております。今後とも何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

国文学科准教授 寺田 守



国語教育学を専門にしています。特に読むことの学習指導の在り方について考えています。「みんなで本を読むと楽しいんだ!」という点に狙いを定めて研究を行っているところです。

国語教師を目指す学生達と話していると高校時代の読書経験がよく話題にのぼります。「友達と定期テストの対策をしていると勉強そっちのけで作品の解釈に盛り上がった」という話をよく

聞きます。だから、文学が好きだ、と言うのです。私は、この辺りに、読むことの学びの大切な核があると考えています。読んでいる間に浮かんできた思いを言葉にして伝えると、反応が得られます。面白さを感じます。読む経験を共有することでしか伝えられない学びが確かにあるように思われます。

昨年度まで大分大学で5年間教員養成に携わってきました。私の経験は僅かなものですが、持てる力と時間を使って、魅力ある国語教師の育成に携わっていきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

体育学科准教授 小松崎 敏

プロスポーツ選手やトップアスリートは、パフォーマンスを高めるために日々猛練習に取り組んでいます。アスリートでさえ難儀している運動やスポーツ（フルゲーム）を、早くも小学校段階から扱うというのですから、体育がおかれている事情は少し特殊で複雑です。このため、フルゲームを学校向けにどのように教材化するのか、フルゲームにこだわる必要があるのか、そもそも何のためにそのような運動やスポーツをするのかといったことが、体育科教育学における論点となっています。

例えばボール運動・球技では、基本的なボール操作

の技術とルールを学べば、フルゲームと「相似」なゲームを「とりあえず」始めることができます。しかし、技術練習→相似ゲームを毎時間繰り返して、「楽しかったね」だけでは、さすがに教科としての存在意義に疑問符がつくわけです。

あまり信じてもらえないのですが、子どもの頃の私は運動が超苦手で、体育は嫌いな教科でした。しかし、なぜかこの分野に足を踏み入れることとなり、今に至っています。体育の学習内容とは何なのか、学習のベクトルはどこに向かうのか、できなかったあの頃の気持ちも踏まえて、考えるようにしています。

何とかなる！

尼崎市立七松小学校教諭 佐野 竜也
(理科教育専攻 平成19年度卒業生)

大学を卒業して2年目の夏を迎えました。小学生から夢見ていた教師になり、目標としている恩師に少しでも近付こうと日々奮闘しています。この夏休みは2学期の研究授業に向けての教材研究や指導案の作成、自然学校の準備など充実した毎日を送っています。

私は大学生生活のなかで、“教師になるために”とそれほど努力した記憶がありません。どちらかという手間のかかることや面倒なことは極力避けていたような気がします。理科教育を専攻しているはずなのに、理科嫌いになりかけた時期もありました。こんな私が常に念頭に置いていたのが「何とかなる！」の合言葉でした。講義で出された難解なレポートや実験、部活動での公式試合、卒業研究はもとより、その本発表や提出など、大学生活において乗り越えなければならない壁はたくさんありました。そんな時、この「何とかなる！」の精神で幾度も乗り切ったような気がしています。

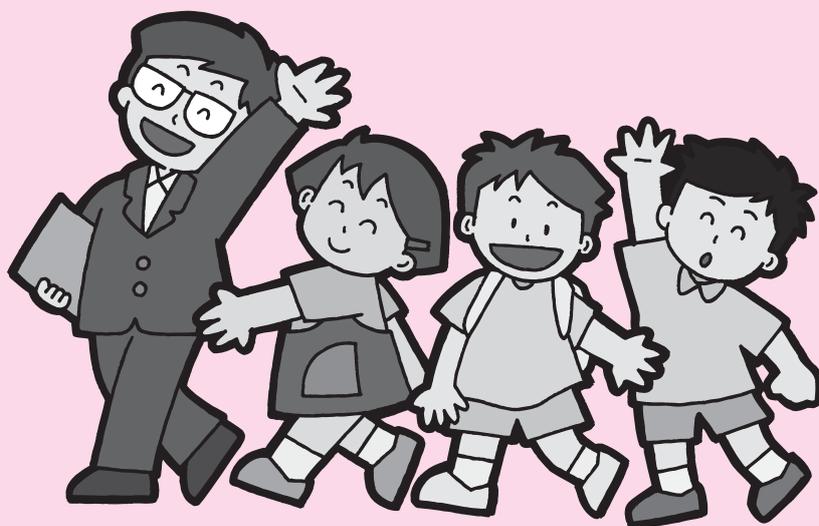
しかし実際の教育現場では、学生時代のそれとは比較にならないほど困難な場面が次々と訪れるものです。1年目の4月の出来事です。クラスの子どもがケガをしてしまいました。初任の私としては、初めての教育現場で、教育者として常にパーフェクトに対処しなければと当たり前のように自らに重石をつけていた

のですが、その時は何をどうして良いのか全く分からず、ただ焦るばかりでした。しかし、こんな時も「何とかなる！」との思いで、子どものケア、家庭との連携に精一杯努め、また他の先生方の協力もあり無事に解決することができました。

この出来事をきっかけに、また教育者として様々な場面に遭遇する中で、全てにおいてパーフェクトでなくても良いと思えるようになってきました。常に最善の方法で解決しようとする心構えは大切ですが、何事に対しても完璧さを求めると、時としてそれが大きなプレッシャーとなり、自分自身を押しつぶしてしまうおそれがあることにも気付きました。困難な場面でも「何とかなる！」というプラス思考があっても良いと思うのです。

「子どもたちにとって先生はあなたしかいない。」何処からともなく聞こえてくるそんな声に励まされながら、“子どものために”と思い、子どもにとってのたった一人の先生でい続けることが大切だと思うのです。

辞めるのは簡単、諦めるのは簡単、逃げるのは簡単です。決して他力本願ではなく「何とかなる！」の精神を持ち続け、私は、2年目の教師人生を歩んでいます。



自分を支えてくれる人

姫路市立香呂小学校教諭 毛利 彰太
(社会科教育専攻 平成19年度卒業生)

「今、自分を支えてくれる人は誰ですか。」
京教に通った4年間、この質問にはこう答えていた
だろう。

「同じ野球部の仲間です。」

と。途中入部だった自分を温かく受け入れてくれた
先輩、少々生意気だが壁のない付き合いで慕ってくれ
た後輩、そして度重なる苦しみを共に乗り越えていっ
た同期の5人。自分は本当に恵まれた仲間とともに4
年間大好きな野球を続けることができたと思う。大学
で学んだことはもちろん自分が14年間続けてきた野
球を通して学んだことを子どもたちに伝えたい。

そのような思いで小学校の教師になって2年目にな
った。何をしていたか分からないまま学級開きをし、
あわただしい日々を過ごしていた1年目。1時間の授
業をすることでさえ悩み、そんなことはお構いなしに
子どもたちは毎日嵐のように登校し、去っていく。
放課後の仕事量の多さに毎日夜遅くまで残って仕
事をしていた。そんな時、同じ小学校に新任で入った
2人の同期の存在が大きな支えになった。遅くまで仕

事をした後、3人でご飯を食べながら相談をしたり、
励ましあったりした。また、初任者研修で出会った
100人を超える同期が、働く学校が違っても同じよ
うなことに悩み、苦勞していることを知った。大学で
の野球部の仲間と同様、教師になっても同じ仲間の存
在が1年目の自分にとって大きな支えとなった。

しかし、今の自分を1番支えてくれているのは、子
どもたちだ。右も左も分からない自分に年の近い若い
先生というだけでついてきてくれた。どんな授業をし
ても手を挙げて発表する子、言われなくても掃除を一
生懸命する子、友だちが困っていたらすぐに優しい声
をかけてあげる子など、「良い子」という言葉だけでは
表現しきれないこの子どもたちは、間違いなく今の自
分の1番の支えである。少々のしんどいことがあっても
この子たちのためにがんばろうといつでも思える。

「今、自分を支えてくれる人は誰ですか。」

「小学校の子どもたちです。」

これから10年、20年たっても同じ答えを言い続
けたい。

食と農の大切さを伝えたい

農事組合法人伊賀の里 モクモク手づくりファーム 角谷 環
(家庭科教育専攻 平成20年度卒業生)

京教大を卒業して半年を迎えましたが、もうずっと
昔のように感じます。京教大での4年間、大学や遊び
やバイトなどで出会った人達から多くの影響を受け、
一生付き合いたい友人とも出会いました。私は現在三
重県にあるモクモク手づくりファームという食と農の
テーマパークで働いています。そこでは、自然との触
れ合いや体験を通じて食と農の大切さを教える活動を行
っています。

現在の仕事に就こうと思ったのは、大学での食に関
する学びの中で、人間の食生活はそもそも農業がなけ
れば成り立たないということに気づき、大学で農業の
勉強をするようになったのがきっかけです。そして農
業や食に関わる様々な問題を目の当たりにしました。
私の職場に体験に来る子どもたちの中には、茶色の身
体をしたジャージー牛を見て、「この牛からはコー
ヒー牛乳が出るの？」と訊ねる子どもがいるくらいで

す。そのような子どもたちが実際に乳しぼりをし、牛
乳の成り立ちを知ることで、食べ物生き物のいのち
からできているということに気づき、食べ物を大切に
するきっかけになればと考えています。

教員になろうかとも考えましたが、子ども達だけ
なくあらゆる年齢層の人々と接しながら、教育に携わ
る機会があるということもあり、現在の仕事を選びま
した。これからも、大学での学びを生かして、食と農
の重要性を多くの人に伝えていきたいと思います。

私は高校～大学とクラブ活動に明け暮れた生活を送り、決して優秀な学生ではありませんでした。しかし、卒業後は氷河時代と言われた就職難の中、幸に教師として京都市に採用され長年小学校教育に携わり数々の経験を積むことができました。何度も挫折を味わいながらも教師道を完走できたことに感謝しています。

教師晩年は社会科教育研究会々長、校長会々長の役にも就き、退職後も府小校長会事務局長の仕事をしながら母校京大や佛教大の非常勤講師も勤めました。

このような道を歩めたのは、多くの素晴らしい人々との出会いがあったからこそと思っています。

これらの経験を通して得たおもい・考えを基に、拙いですが表題について述べさせていただきます。

教師道とは＜備えたい資質や努力目標＞

- * 先ず、子どもが好きであること
 - * 徹底的にひとりひとりの子どもを大切にできる
 - * 子どもの心・気持が分り受容できる度量を持つ
 - * 授業で勝負できる指導力を培う
 - * 自ら進んでいろいろな経験や体験することに挑戦し、前向きに汗をかける
 - * 人との出会いを大切に、人を好きに人を尊べる
 - * 幅広いヒューマニティーを養う
 - * 愛・包容力・正義感を持ち、人格・品性を磨く
 - * 義理人情を重んじる
- 等々、数え上げれば枚挙にいとまがありません。

これらは、言い換えれば一人前の教師として身に備えておくべき力量や人間性と言えるかと思います。

教師に望まれる力・人格

『実行力』 不言実行、言易行難という言葉があります。実行は簡単ではありません。逃げずに挑戦、苦しくとも前に進む。行動を促す決断力も大切です。

『判断力』 授業で行きどまった時、指導案通りに進めるべきか、子どもたちの動きを見て軌道修正すべきか即断が求められます。やはり多種多様な経験を積むことでしょう。

『指導力』 子ども達への指導は勿論、組織内において、自分のおかれている立場での対社会人（多くは教職員や保護者）へのリーダーシップが求められます。

『先見性』 大所高所に立ち、今までのプロセスを鑑み、この先どうしていくのがベストか。子ども達に対しての教育の進むべき道について、抱えている課題解決に向けて等、中・長期的見通しを持つ、立てられることが重要です。生易しいことではありませんが。

『人となり』 慕われる人、何時までも心にとどめておいてもらえる人でありたい。自己鍛錬をし豊かな包容

力を身に付けることでしょうか。愛する心を常に持ち続けることでしょうか。

大事にしたい、していきたいこと

—— 我が人生をふり返って思う諸々 ——

私は水泳部で活動してきました。大学にプールは無く、毎日附属桃山小のプールを借りての練習でした。寒い日も雨の日もひたすらプールに飛び込み練習の苦しさ辛さはうんと味わいました。しかし、ここで苦しさ打ち勝つ強さ、なにくそと耐える根性が養われたと思っています。教師になり、授業に悩み学級経営に迷い研究にいき詰まったりとくじけそうになった時、猛練習に耐えてきたことが頭を過り挫けることなく幾度も壁を乗り越えられました。クラブ活動、ボランティア活動、アルバイト、健全な遊び等々、何かを通して若い時代に苦難に耐える数々の体験をしておくことが必要です。勉学一筋、良い成績を得ることのみ邁進するのではなく、個性ある一人一人の子どもを理解し指導する上で幅広い経・体験を積むことは不可欠です。

次に、挑戦することの大切さを訴えます。逃げたくなる研究授業。自ら進んで買って出て実践しました。コテンパーに叩かれました。次こそはと何度も再挑戦しました。授業の奥義は教わることではなく盗むことだと会得しました。近畿の大きな社会科の大会を会場校教師として2度体験しました。しんどかったが貴重な経験でした。私を大きく育ててくれたと思います。

良い授業、いつ迄も教師仲間的心に残る授業実践に挑戦することです。良い授業・優れた授業は齢を取らない。賞味期限ナシと言われていました。

最後に、人との“出会い”が人となり、人間性を育む尊い糧だと思います。一人前の教師になれたこと、能力のなかった私をここまで育てていただいたこと、これらは総て教育界を始め多方面の世界（社会）の“素晴らしい人々との出会い”があったからこそです。幸せです。有難く感謝の気持で一杯です。人を大切に、人との出会いを大事に。これからも道標をそこに求めて生きます。

立派な教師（人間）になるために

- ☆慕われる先生に
 - ☆人の痛みが分かる教師に
 - ☆人間の正しい生き方をとことん追求していける人に
 - ☆自動車のハンドルにあそびがあるように、常に100%の力を出しきるのではなく20%くらいのおそびの部分（余裕）を常に持って取り組める教師に
 - ☆出会いを宝にできる人間（教師）に
- “教師道”を極めることは容易ではありませんが・

第 124 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

124 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 124 号をお届けいたします。本号の特集は『がんばっています！教育学研究科（理科教育での取り組み）』、『教員研修モデルカリキュラムの研究開発』です。

本学では平成 20 年に連合教職実践研究科（京都連合教職大学院）を設置しましたが、従来からの大学院である教育学研究科もこれまで以上に充実したものとするため様々な取り組みを行っています。今回はその中から理科教育、学校教育の分野における取り組みをご紹介します。

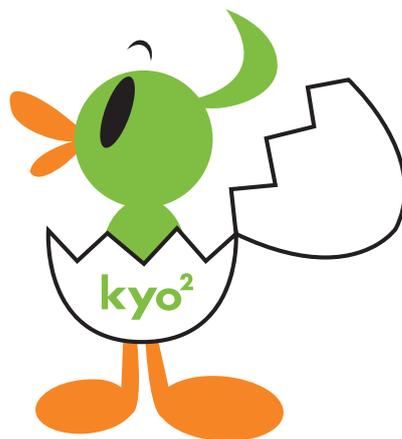
なお、今号の表紙を飾るのは附属京都中学校の宮原ななせさんの作品です。みずみずしい感性と確かな技術から生み出された神秘的な世界をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 武蔵野 實



地域連携・広報委員会

委員長	武蔵野 實				
副委員長	相澤 雅文				
委員	饗場 知昭	田中 里志	浅井 和行	延原 理恵	
	杉本 厚夫	荻野 雄	榊原 禎宏	富家 健治	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第124号

発行日
2009年10月30日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>